

今生き
よしもと
未来へ

気仙沼市立病院

**東日本大震災
活動記録集**

海と生きる

病院管理者 気仙沼市長 菅 原 茂

千年に一度といわれる未曾有の大震災により、本市は甚大な被害をうけました。かけがえのない1,200名を超える尊い命が奪われるとともに、先人から大切に受け継いできた自慢の郷土、美しい気仙沼は一瞬にして姿を変えてしまいました。

この震災により、お亡くなりになられました皆様のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

災害発生以降、日本中はもとより世界各地の皆様からの心温まるご支援をいただきながら、復旧・復興に全力で取り組んでおりますが、今なお震災の爪痕は深く残り、市民生活に大きな影響を及ぼしております。

気仙沼市立病院は古くから気仙沼医療圏の医療福祉に関して中心的な役割を担って参りました。この度の震災で、他の沿岸部地域のいくつかでは壊滅的な損害を被った医療機関もある中で、幸運なことに倒壊や津波災害を免れて、災害医療の拠点として十二分に役割を果たすことが出来ました。自ら被災した職員は家族の安否を振り返ることなく震災に立ち向かい、懸命に献身的に被災地の医療を支え続けました。また、病院内が平常を取り戻した後も、復興を歩む気仙沼での医療福祉活動につきつけられた新旧の課題に対して、真摯に向き合い、問題意識を高く持ちながら様々な新しい取り組みが着手されています。

本市が目標とする「世界に羽ばたく産業のまち」「日本で一番住みたいまち」にかなう故郷気仙沼市をつくるためには、市民が安心して暮らせる環境整備が欠かせません。気仙沼市立病院に課せられた地域住民の健康と命を守るという大きな使命と活動は、その基礎を支える重要な役目であり、新病院建設が予定されるなか、益々の発展充実が期待されています。

最後になりましたが、震災にあたり当医療圏の活動にご支援いただきました全国の医療関係者の皆様に深く感謝申し上げ、気仙沼の新しい歴史を温かく見守り下さいますようお願いして、あいさつといたします。

大震災

病院施設長 気仙沼市立病院 院長 遠 藤 渉

2011年3月11日、三陸沖に大地震が発生、それに引き続く1000年に一度ともいわれる大津波が東日本を襲い、多くの人命、家屋、生活基盤が失われました。数ヶ月という時は絶ちましたが、まだ夢のようです。被災された方々には、心から哀悼の意を表し、お見舞いを申し上げます。

災害拠点病院となっている気仙沼市立病院は、幸運にも築46年の古い病棟がなんとか持ちこたえ、また、小高い丘の上に立地していたため、かろうじて津波の直接的な被害は免れました。しかし、他の被災地域と同様にライフラインが途絶し、食糧不足、重油の枯渇、自家発電機故障、火災の延焼の危機など、当院も機能停止寸前まで追い込まれました。私どもの職員は、その三分の一が被災する中で、各部署での的確な状況把握に努め、現状に沿った速やかな対応を心がけ、それぞれが自分のやれる最大限の力を發揮してくれました。

更には、震災直後から各地のD-MAT、大学、病院、施設、企業、個人にいたる様々な方々から多大なるご支援、励ましをいただき、甚大な被害を受けた災害地の拠点病院としての役割を果たすことができました。この誌面をお借りして厚く御礼申し上げます。

未曾有とも想定外ともいわれる大震災を簡単に総括できるものではありませんが、災害地の拠点病院として果たした役割と、改めて浮き彫りになった課題を明らかにして、これを社会に公表する責務があると考えております。平静を取り戻すには、まだまだ多くの時間と労力が必要で、院内業務も多忙を極める中で、各部署で発表、討議が重ねられてこの冊子にまとめられました。将来、東海、東南海、南海地震などの発生が危惧されておりますが、我々が経験した貴重な体験が、次の災害に備える一助になれば幸いです。

感謝、多謝

気仙沼市立病院 脳神経外科科長
宮城県災害医療コーディネーター 成田 徳雄

発災後1年が経過しましたが、あの時、ご支援していただいた皆様方への感謝の思いに変わりはありません。東日本大震災気仙沼DMAT・医療救護班解散式における、小生からあてた、“解散の辞”を再掲いたします。

平成23年6月30日、東日本大震災気仙沼DMAT・医療救護班本部の解散式にあたり、東京都、全日病、横浜市およびこの気仙沼に参集したすべてのDMAT・医療救護班の皆様に、また後方で支援していただいた東北大学を始め多数の関係各位に対し、先ずもって心より感謝申し上げます。

3月11日発災し、決して充分な災害医療の知識も持たない我々に、皆様方には様々な場面において、的確にご指導いただき、また迅速で機能的な行動を見せていただきました。さまざまな活動・任務を通じ、災害医療チーム“チーム気仙沼”として段階的に成長してきたように思います。3月15日早朝、病院に市街地の火災が近づき、さらに仮設電源が不具合を生じたための院内重症患者の東北大学への緊急搬送。3月22日・23日慢性透析患者78名を雪の松島空港からの自衛隊ジェット輸送機による広域搬送。3月21日インフルエンザ第一例発生後の避難所での隔離および濃厚接触者への予防的薬剤投与の判断。3月28日大量の急性肺炎発生にあたっての多方面からの調査・救護所でのガイドライン作成及びワクチン投与に対する依頼・調整・運用。災害急性期より生活支援体制が必要であるとの認識より、3月25日に巡回療養支援隊を立ち上げたこと。ライフラインが復活した4月頃より各避難所での生活不活発病対策が必要であるとの認識で日本リハビリ関連10団体からリハビリスタッフの支援をいただいたこと。などなど様々な局面でご支援していただきました。

表に見える事例だけではなく、避難所での環境整備のために、雑巾掛けしたり、トイレ掃除をしている姿も見せていただきました。来た道は違えど、職種は違えど、被災地の気仙沼に来て、気仙沼の被災者のために真摯に活動していただいた皆様方には全く持って、頭の下がる思いであります。

初めから勝利のない戦いでしたが、皆様とともに負けない医療・あきらめない医療ができたと思いますし、今後も同様に継続して復興のための任務にあたっていきたいと考えております。皆様方の生活の場に戻られても、これから続く気仙沼復興のニュースに接した時には、自分のこととして喜んでください。皆様方との絆はこれからも永遠に続くものと信じております。

21世紀の人間は3つに分類されます。災害を経験せずに亡くなられた方、災害を経験し生きた方、災害後に生まれる子供たち。我々は災害を経験し今後も生きてく人間です。20世紀のあの戦後の復興と同様に我々の責任は重大であると認識しております。気仙沼への思いをどうぞ今後も持ち続けてください。我々はそれに答えられるよう共に頑張るつもりです。今後ともよろしくご支援の程お願ひいたします。

目次

巻頭言

病院管理者 気仙沼市長 菅 原 茂	3
病院施設長 気仙沼市立病院 院長 遠 藤 渉	4
気仙沼市立病院 脳神経外科科長 宮城県災害医療コーディネーター 成田 徳雄	5

市立病院における経過	15
------------	----

災害医療活動報告

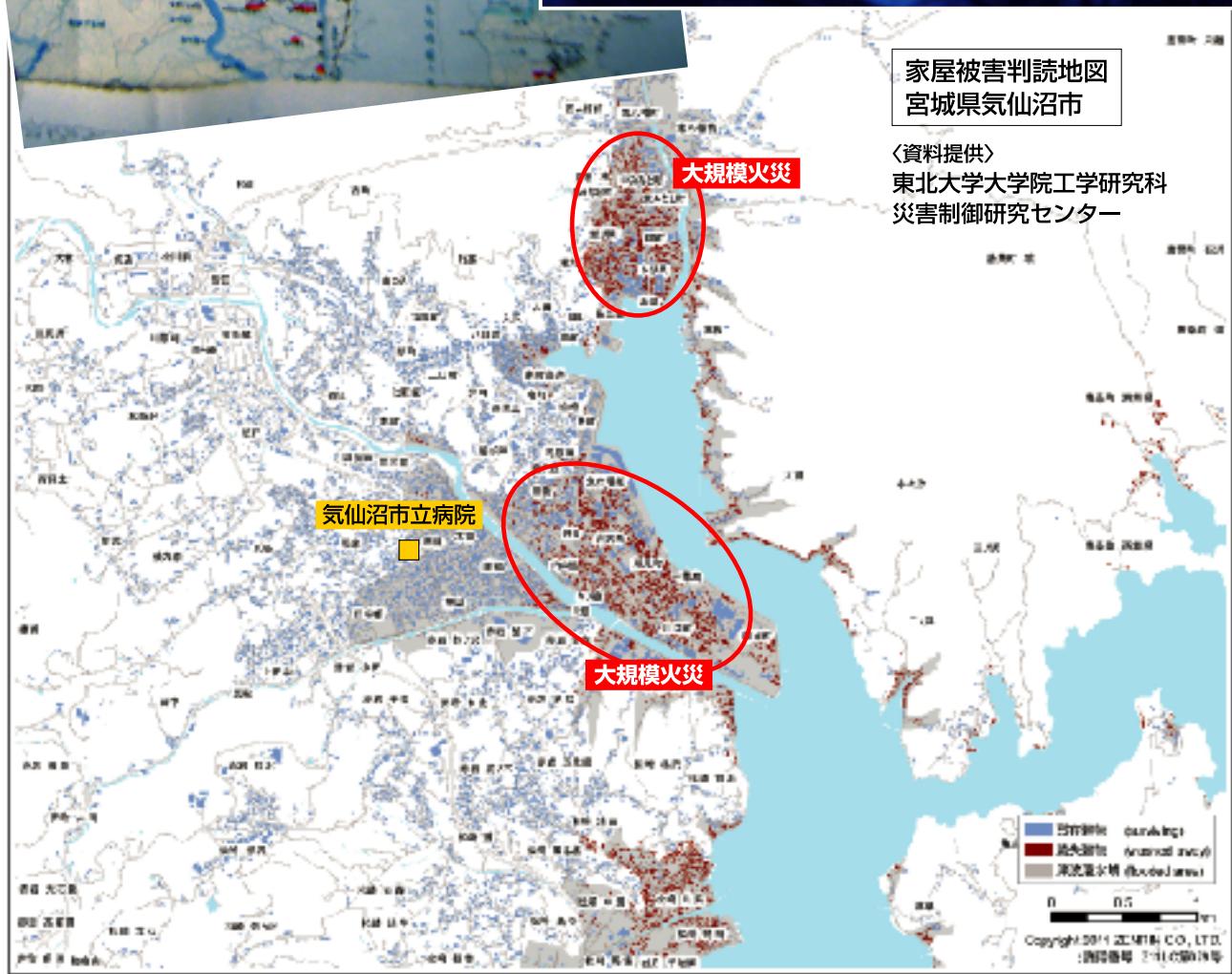
診療部 医局	26
研修医	36
透析センター	42
薬剤部	46
看護部 看護部長室	52
病棟部門	58
外来部門	102
透析部門	118
中央手術室	122
技術部 放射線室	128
検査室	132
リハビリテーション室	136
MEセンター	140
栄養管理室	144
事務部 総務課	152
医事課	163
附属看護学校	174
地域連携室	182
おわりに 気仙沼市立病院 副院長 安 海 清	195

編集後記

題字：小野寺 初 惠

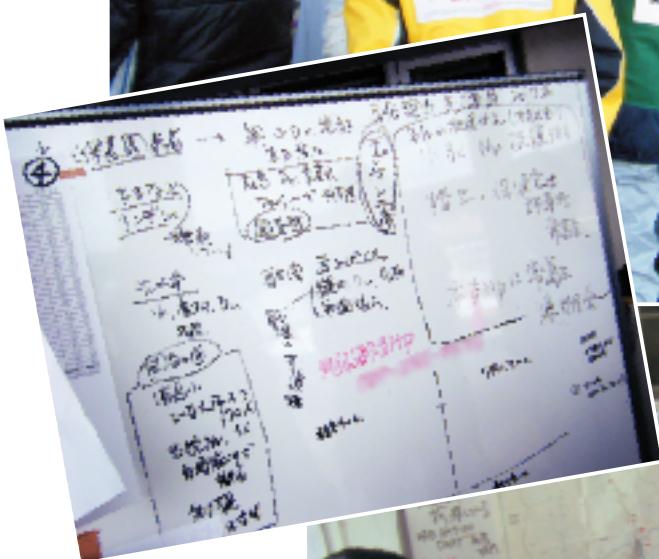


大川を逆流してきた津波





D-MAT
ミーティング



救急外来前掲示板



医局ミーティング

市災害対策本部



広域ヘリ搬送



五右衛門ヶ原

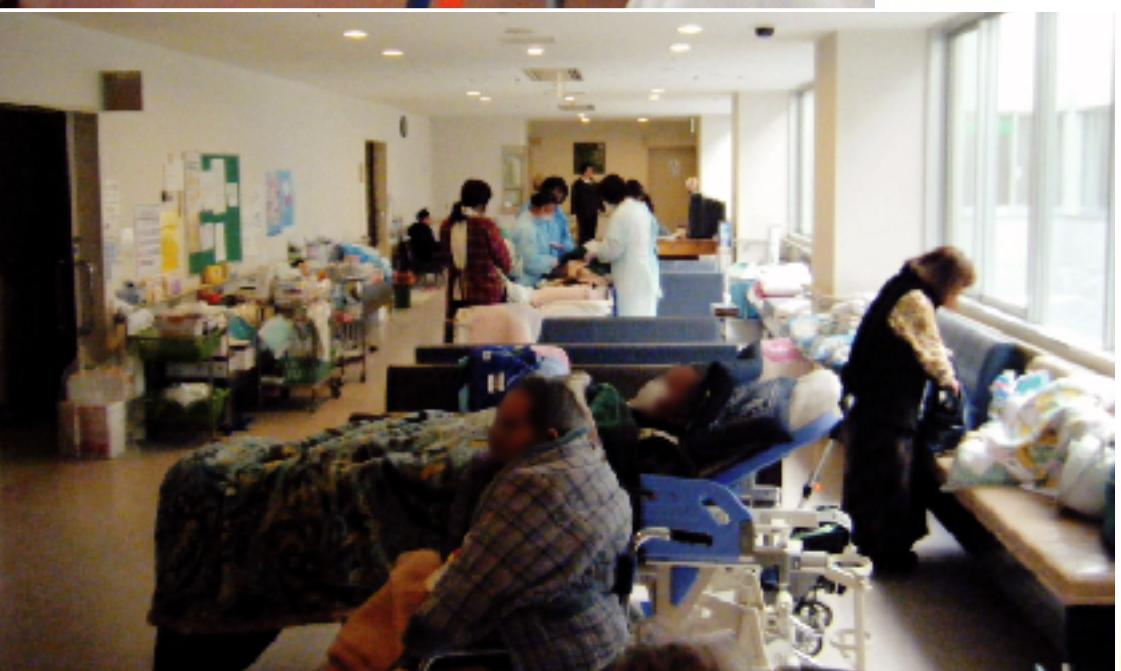


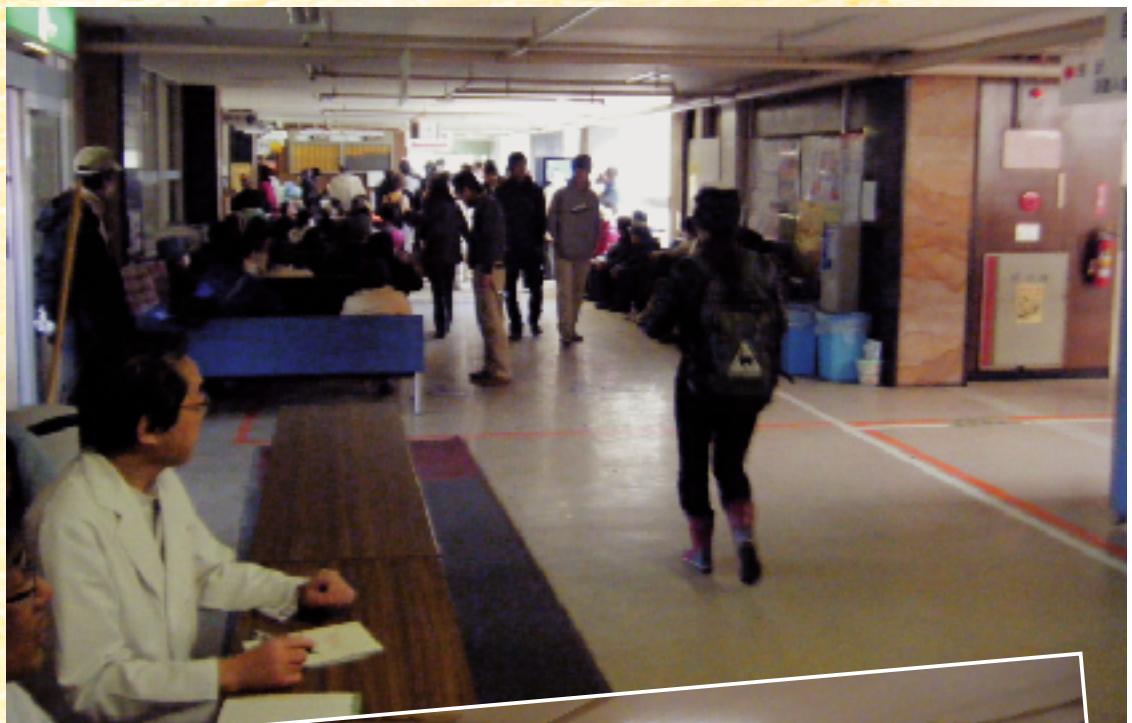


トリアージテント



避難所での診療





薬剤支援物資

